

## 第54回Kozoom28 「終い弘法さん」のこと

清水健二



東寺・五重塔

今年も「終い(しまい)弘法さん」が過ぎると暮れていく。東海道新幹線が京都駅を出て西へ向かうと、すぐ車窓から五重の塔が見える。仕事にしろ 旅行にしろ 大阪を離れて数日しか経っていなくても、この景観を眺めほっとする。

五重の塔は一際高く木造55mで日本一大きく徳川家光再建の塔で、広大な伽藍を誇る東寺である。別名「教王護国(きょうおうごこく)寺」と呼び平安時代に、嵯峨

天皇が唐で密教を学び帰国した弘法大師空海にこの寺を下賜した。そして国家鎮護の寺として官立寺院の役割をなし、空海はここを真言密教の根本道場として布教した。大伽藍を有した東寺は度重なる大火に会っては再建されてきたが、創建時の姿をとどめ今も参詣する人々は絶えない。

空海が亡くなったのは835年3月21日で、毎月21日の命日に供養されることになり、皇族から庶民に至るまでお参りする行事となっていた。境内に参詣者の休み所として茶店ができ、次第に日用品や食品の店が増えていったという。毎年1月21日は「初弘法市」として始まり、12月21日は「終い弘法市」として賑わう。現在では1,000店以上の露天店がひしめき、訪れる人々は1日で20万人と言われている。骨董、古着、古道具、植木、薬、食材、食品等々の店はそれぞれ自分の自慢の商店をもち、出店としてここに露天を開いているので、現在流行りのフリマとは違っている。その他に月初めの



「終い弘法市」東寺境内



「終い弘法市」 東寺門前

日曜日には「がらくた市」もこの東寺で開かれている。不思議なことに月2回の出店を続

けてきているのは、来訪者の多くが買っていくから商売が成り立つからであろう。物のない時代ならわかるが、日本中どこに行っても日常品の数々は容易に手に入る世の中で、態々この「弘法市」や「がらくた市」へ出かけて購入したい魅力は一体何なのかと考えてしまう。

私の居住する八尾市は江戸期から続いてきた「お逮夜市(おたいやいち)」があって、隣町の久宝寺の大寺「顕証寺御坊」から八尾の大寺「大信寺御坊」に至る約2km弱の沿道に露天がひめい

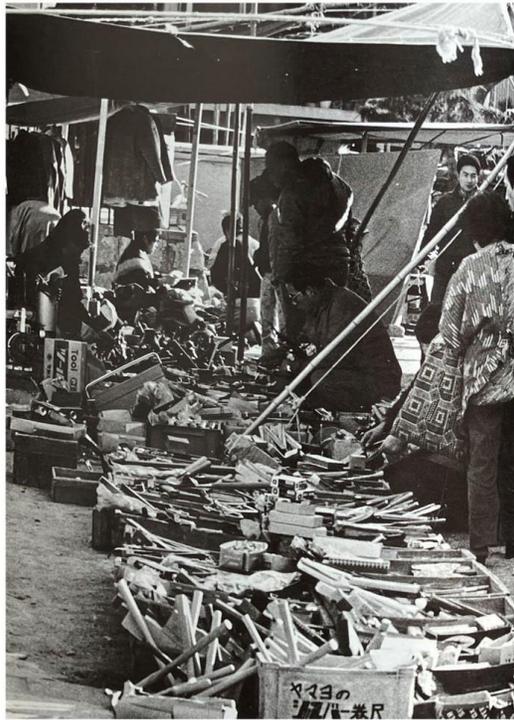
ていた。毎月11日と27日に開催されていて11日は顕証寺の初代住職の命日に、27日は浄土真宗の宗祖親鸞聖人の命日前日に行われ、日用品、衣服、農機具、工具、植木、食品等ないものが無いほど品揃えしていて購入でき、近隣の人々が押し寄せていた。私も高校の2年生の時に八尾に移り住んだ頃に、この「お逮夜市」に出かけてその賑いに驚いたものだった。その賑わいは現在全く面影を潜めてしまっている。時代の流れで日常の生活習慣が大きく変わり、家には物が溢れ露天で求める必要もなく自然消滅してしまった。しかし沿道の家で店を構えていた畑にまく種や苗屋、豆屋、花・植木屋等の店は



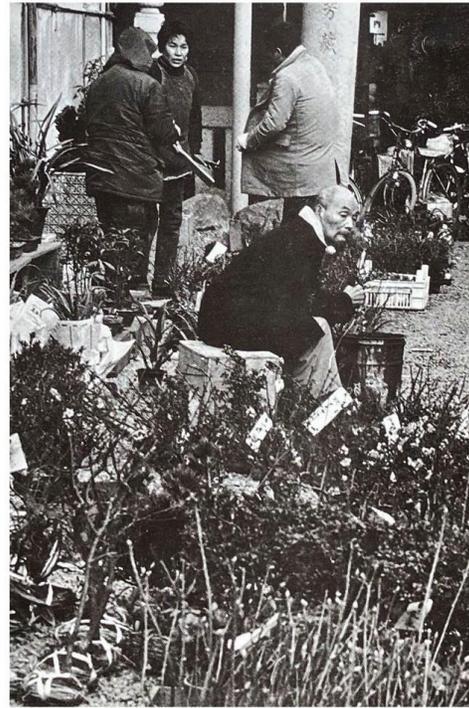
「終い弘法市」 東寺境内



「終い弘法市」東寺境内



「お逮夜市」 八尾



「お逮夜市」 八尾

残って細々商売を続けている。なかには鍛冶屋などをやっていた家の名が残っていて、鍛冶さん、家治さん、包丁さん等という名字の家もある。

近年スーパーや大型日曜大工店をよそに、露天店が東寺では何故賑わうのか不思議に思いながらも私は寺を訪ねることが多い。子どもの頃の懐かしい玩具や珍しい什器類等並んでいて楽しんで眺めていても買う気にならない。骨董品など欲しいなと思っても、我が家にはたまりに溜まった数々のがらくたの処分に関り、さりとて断捨離も決断できずにいる現状では、買うより売りたい心境になっている。

東寺の賑いは、私の察するところ京都人は古いものへの愛着や、伝統的な物への敬意が心にしみ込んでいて、物を大切にする生活習慣があることと、東寺という寺に対する安らぎの場や、京都に住む誇り、更に弘法大師信仰の篤さが継承されてきているからであろうと思う。

私が東寺を訪ねる楽しみは、講堂に安置されている仏像の数々に出会えることである。世界文化遺産に登録されたのは1994年で、堂塔の中の講堂だけでも居並ぶ仏像は21体

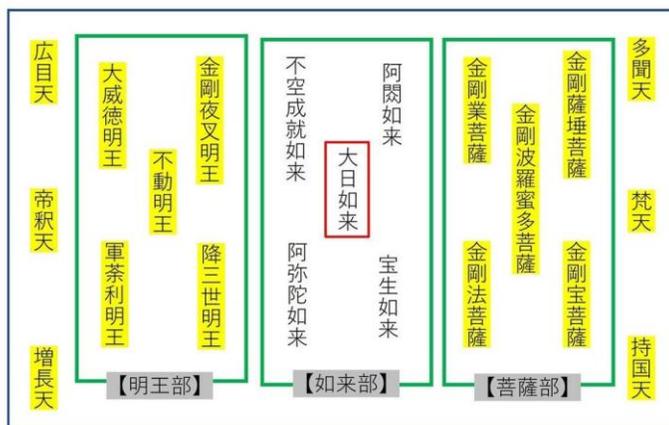
あり、そのうち16体が国宝である。

一般に仏の世界を表す絵画に曼荼羅(まんだら)があり、各地の真言宗の古刹には金剛曼荼羅や胎蔵曼荼羅が残され、真言密教の悟りの境地である宇宙の真理を大日如来仏を頂点にして、菩薩・明王・天を配列し視覚化したものである。金剛界は悟りへの道筋を、胎蔵界は慈悲の広がり表現しているとされているが、これらは平面的な絵に対し、東寺の仏像彫刻群は立体曼荼羅という正に圧巻迫るものである。大火を逃れ1200年を超える歳月を守り、残してきた先人達の偉業に頭が下がる思いである。これらの仏像を拝して私は彫刻を始めた頃は模刻の勉強をしてきたが、その中に特に五大明王の一つ、「降三世(こうざんぜ)明王」をヒントに印相だけを私流に彫刻した作品がある。この高津のHPにも紹介したことがあるが、私の自作で気に入った作品の一つである。

もともと真言密教は閉鎖的な色合いが濃いのにに対し、この東寺は開放的で様々な悩みや願い事を受け入れてもらえる仏たち



東寺・立体曼荼羅



黄色マーカーはすべて国宝

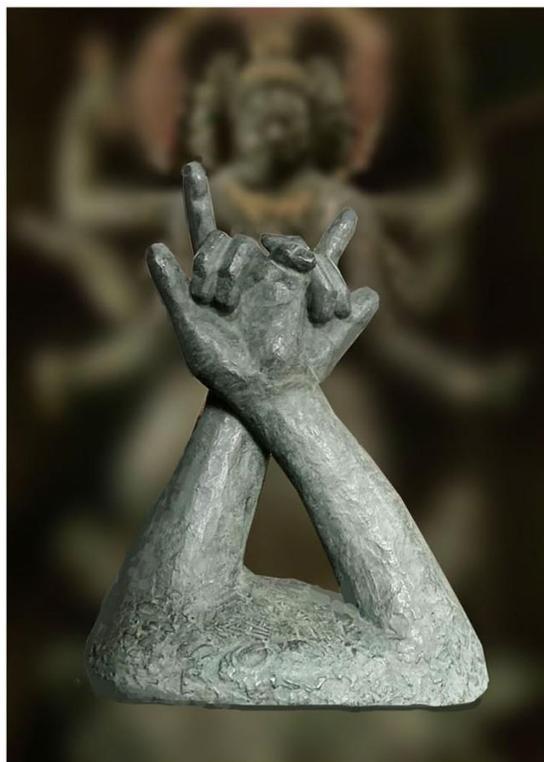
東寺・立体曼荼羅説明図



金剛界と胎蔵界曼荼羅図会



降三世明王(東寺)



私の作品

が居られ、しかも千年の時を経て人々の心の支えになってきた仏教美術の数々に出会うことができる。また弘法大師の教えに触れ至福の時を過ごせる庶民的な寺と言えよう。

大師の言葉に「諸仏威護して一子の愛あり」と言う。(全ての仏達は我が子に愛を注ぐ如く接して下さる)という意味だが、まさしく東寺の立体曼荼羅はそれを実感させてくれる。来年も東寺の賑いと仏たちに出会い、卒寿まで生きてきた喜びと幸せを感謝できるよう、新年を迎えたいと思っている。

令和6年12月 記